

シリーズ《本格ミステリ入門（海外編）》

執筆 大村 拓

第2回 「ミステリの女王 アガサ・クリスティー」

第一次世界大戦終結から第二次世界大戦勃発までの約20年間は、本格ミステリの長編の傑作が次々と生み出された、ミステリ・ファンにとって最高に幸福な時代である。これをミステリ界では「本格ミステリの黄金期」と呼ぶ。本企画の第2回目以降は、この黄金期に活躍した代表的作家たちを紹介していこう。今回はミステリの女王と称され、世界で最も愛されているミステリ作家アガサ・クリスティーを取り上げてみたい。



アガサ・クリスティー（1890-1970、イギリス）

クリスティーのデビューは、1920年の◎『スタイルズ荘の怪事件』（★933ク 早川書房）においてであった。この本の刊行はまさに本格ミステリ黄金期の開幕を告げるものであった。この後、彼女は100冊（作品では長編66・中短編156・戯曲15編、その他アガサ以外のペンネームもあり）に迫る作品を書き続け、ミステリの発展に多大なる貢献をしていく。その中には主に初期に書かれたスリラー（謎解きよりもハラハラドキドキを優先するミステリ）や非ミステリの恋愛小説も含まれるが、その真骨頂はやはり大半を占める本格ミステリの創作にあることは間違いない。



クリスティーの特徴を挙げてみよう

第1の特徴は、そのサービス精神の旺盛さであろう。意外な犯人や意表を突く設定など、読者を驚かせることを最優先にして書いていく姿勢は本格ミステリ作家の鑑である。このような姿勢は実はイギリス作家には珍しい資質であり、クリスティーの独自性がここにある。通常イギリス作家は、一筋縄ではいかないひねくれた味わいや滋味を特徴とする人が多い。クリスティーのような真っ正直なエンターテインメント精神は、むしろアメリカ作家の特徴といってよい。彼女にはアメリカ作家のような派手さはないが、なめてかかってはいけない。解決部分で必ずあっと驚かされるはずで、女史のニヤリとする顔が思い浮かぶ。

第2の特徴は、多作家でありながら、当たり外れがきわめて少ないということである。ミス

テリ作家は、ある程度作を重ねるとアイデアが枯渇し、質が落ちてくるのが通例だが、クリスティーは晩年に至るまで高い水準を維持しているのが驚異的である。従って、クリスティーの作品は必ずしも代表作から読まなくても、失望させられることは少ない。最晩年に書かれた数作を除けば、どれも一定の水準をクリアしているのである。

第3の特徴は、そのだましのテクニックのうまさである。決定的な手がかりは、こっそりと仕込むのではなく堂々と読者の眼前にさらすのである。そんなことをしたら、誰にでも真相を見抜かれ、意外性がなくなるのではないかって？ 心配はご無用である。どんなに堂々と見せられていても女史の巧みなテクニックで、私たちはまったく違った意味に思いこまされているので、真相を見抜けないのである。ちなみにこのようなテクニックを奇術用語を使って「**ミスディレクション**」という。

そして第4の特徴は、その心理探究の確かさである。名探偵の解き明かす登場人物たちの隠された心理は、人間観察の確かさに裏打ちされており、なるほどとうならされる。嫉妬や悪意などマイナスの心理は、ともすれば読者自身の秘めた心理をえぐり出してしまうこともあるだろう。

一方、欠点としては、文章が平易すぎてつまらないことや、登場人物が毎度お馴染みの似たタイプばかりで面白味がないことが挙げられよう。また事件の展開が関係者の事情聴取が繰り返されるだけの単調なものになってしまうことが多く、やや退屈な点も欠点の一つだ。

それでは以下にクリスティーの代表作5作を選んで紹介してみよう。

### 1. ◎『そして誰もいなくなった』（1939年）（★933ク 早川書房）

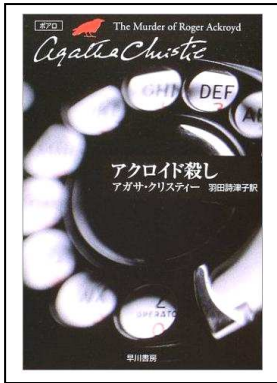


**【内容】** その孤島に招き寄せられたのは、互いに面識もない、職業や年齢もさまざまな10人の男女だった。だが、招待主の姿は島にはなく、やがて夕食の席上、彼らの過去の犯罪を暴き立てる謎の音が響く……。そして無気味な童謡の歌詞通りに、彼らが一人ずつ殺されてゆく！ 強烈なサスペンスに彩られた最高傑作。

クリスティーの代表作にしてミステリのオールタイムでの代表作でもある。隔絶された孤島に集められた10人の招待客たちが次々と殺されていく。このように他から隔絶している舞台上で起こる連続殺人は、警察の介入が及ばない点が特徴であり、互いに犯人かもしれないと疑い合う中で、一人また一人と殺されていく展開は、最高にサスペンスフルである。ちなみにこのような設定をミステリ界では「**孤島物**」とか「**雪の山荘物**」と呼び、本作を手本とした作品がこの後、次々と生み出されていく。後世に最も影響を与えた作品といってよいかもしれない。またマザー・グースの童謡（イギリスのわらべ歌）に則って次々と殺人が行われていく形式は、「**見立て殺人物**」と呼ばれる。この形式の発明者は、第5回で取り上げるヴァン・ダインという人であるが、本作での効果的な使われ方も元祖にひけをとらない。クリスティー自身にとっても大好きな趣向らしく、この後数多くのマザー・グース物を書いている。

そして本作の最大の特徴は、題名から想像できるとおり、「そして誰もいなくなっ」てしまう筋立てである。外部から接近不可能な孤島にいる10人が一人ずつ殺されていき、「そして誰もいなくなっ」てしまうなんて、考えただけでも興奮してしまうでしょう？ でもこの肝心の趣向を題名にしてしまうのは、読者にとっては事前に知らされたくないことなのだから、本当はネタバレであり、あまり感心できない。実は元々イギリス刊行時のタイトルは『**Ten Little Niggers**（10人の黒人の子）』（これがマザー・グースの歌の題名）だったのを、アメリカ刊行時に『そして誰もいなくなった』と改題してしまったものなのだ。でもたとえネタバレになってしまっても、この魅力ある題名は何ものにも代え難いものだけだ。

## 2. ◎『アクロイド殺し』（『アクロイド殺害事件』）（1926年）（★933ク 早川書房）



【内容】 深夜、村の名士アクロイド氏が短刀で刺殺されるという事件がもちあがった。容疑者である氏の甥が行方をくらませ、事件は早くも迷宮入りの様相を呈し始めた。その前にさる婦人が睡眠薬を飲みすぎて死んでいる。シェパード医師はこうした状況を正確な手記にまとめ、犯人は誰か、という謎を解決しようとする。しかし、村に越してきた変人が名探偵ポアロと判明し、局面は新たな展開を…。クリスティーの作品の中でも、代表作としてとりあげられる名作中の名作。独創的なトリックは古今随一。

意外な犯人のミステリとして最も有名な作品である。読者が、意表を突くトリックだとその意外性に素直に感心するか、逆にこれは認められないと腹を立てるか、賛否両論で論争まで巻き起こしたほどだ。その点でこの犯人があまりにも有名になりすぎたため、あらかじめ犯人を知らずにこの作品を読むことができる人は幸運だとまでいわれるほどである。かくいう私も、生涯で最初に読んだ大人向けミステリは本作であったにもかかわらず、その段階で既に犯人は知っていた。だから本作はできるだけ先入観を持たずに読んでもらいたい。

しかし本作の魅力は、その意外な犯人にだけあるのではない。たとえ犯人を知っていて読んだとしても、この作品は十分に面白い。それは、綿密に張り巡らされた伏線や小さなトリックの組み合わせなどミステリのお手本といってよいものが、ここにはあるからだ。

そしてここで活躍する名探偵がエルキュール・ポアロである。彼はクリスティーが創造した数ある名探偵の中でも、最も出番が多く最も著名な人物である。小柄でオシャレ、気取り屋でうぬぼれ屋のキャラクターは、何とも憎めない愛すべきものである。彼の決まり文句は「灰色の脳細胞」。自分の頭脳の優秀さを誇って使う言葉だ。イギリスで探偵事務所を開くポアロは、言葉の端々にフランス語を挿むので、よくフランス人と間違えられるのだが、本当はベルギー人である。ベルギー警察の元敏腕刑事だった彼は、戦争難民としてイギリスに亡命してきたのである。本作では、事件現場となったアクロイド邸の隣で、カボチャ作りに夢中になっている隠居老人として、事件と関わっていくことになり、ポアロの魅力が遺憾なく発揮されている。

## 3. ◎『オリエント急行の殺人』（1934年）（★933ク 早川書房）

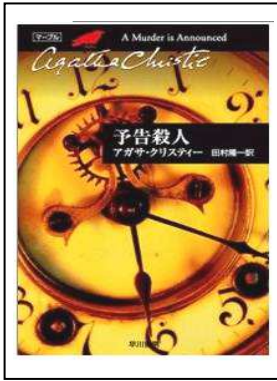
【内容】 真冬の欧州を数日がかりで走り抜ける豪華寝台列車「オリエント急行」には、国籍も身分も様々な乗客が乗り込んでいた。雪の中で立ち往生してしまったその車内で、いわくありげな老富豪が無残な刺殺体で発見される。殺されたのは、金持ちのアメリカ人男性。偶然乗り合わせた名探偵ポアロが捜査に乗り出すが、すべての乗客には完璧なアリバイが…。はたして、ポアロの推理は…。ミステリの魅力が詰まった永遠の名作。



フランスのカレーとトルコのイスタンブールを結んでヨーロッパ大陸を横断する豪華列車「オリエント急行」が舞台となった、鉄道ミステリの傑作である。本作では、食堂車や一等客室などの列車内部が詳細に描かれ、あたかもオリエント急行で旅している雰囲気が味わえるのが魅力の一つである。鉄道マニアならそれだけで嬉しいことだろう。しかし、事件は列車内からは一步も外に出ないので、観光気分を味わうことはできないので、あしからず。

さて肝心の事件についてであるが、客車の中で12カ所もナイフでめった差しにされたアメリカ人大富豪の死体をめぐる謎である。偶然乗り合わせたポアロが国際色豊かな乗客たちから聞き取りをすることで、最後に解き明かした真相は、まさに想像を絶するほど意外なものであった。この意外さはある意味、前述の『アクロイド殺し』をしのぐかもしれない。

#### 4. ◎『予告殺人』（1950年）（★933ク 早川書房）



【内容】 その朝、新聞の広告欄を目にした町の人々は驚きの声を上げた。「殺人お知らせ申し上げます。12月29日金曜日、午後6時30分より…」いたずらか? 悪ふざけか? しかしそれは正真正銘の殺人予告だった。時計の針が予告の午後6時30分を指したとき、銃声が響きわたる! 大胆不敵な殺人事件にミス・マープルが挑む。

地元新聞に掲載された殺人の予告。野次馬根性で押しかけてきた来客たちの眼前で、予告どおりの場所、予告どおりの日時に、予告どおりに殺人が起きるのである。その魅力的な発端が本作の最大の魅力である。その後の展開は盛り上がり欠ける嫌いもあり、解決もとびっきり意外というわけではない。しかし細かな点までよく行き届いた作りは、ある意味クリスティーの典型と言ってよく、クリスティーらしさを味わうには最適の作品かもしれない。

そしてここで活躍するのがポアロと並ぶ二大探偵のもう一人、ミス・マープルである。上品で独身の老婦人であるミス・マープルは、一見するとか弱くてオーラのない平凡な存在であるが、実は驚異的な推理能力の持ち主なのである。嗜好きの彼女の頭の中には、彼女の住む小さな村（セント・メアリ・ミード村）の住民たちから長年の間に得られた知識が蓄積されているだけである。しかし、そんなローカルな知識を一般化することで、実に説得力のある人類普遍の真理を導き出し、事件を真相に導く。その能力は、まさに天才的である。本作はそのミス・マープルものの代表作である。

#### 5. ◎『ナイルに死す』（1937年）（★933ク 早川書房）

【内容】 美貌の資産家リネットと若き夫サイモンのハネムーンはナイル川をさかのぼる豪華客船の船上で暗転した。突然轟く1発の銃声。サイモンのかつての婚約者が銃を片手に二人をつまみあげていたのだ。嫉妬に狂ったの凶行か? だが事件は意外な展開を見せる。船に乗り合わせたポアロが暴き出す意外きわまる真相とは。



クリスティーは二度目の夫が考古学者であったため、しばしば彼についてオリエントへの発掘旅行に同行している。そしてその経験を生かして、いくつかのオリエントを舞台としたミステリを書いている。

本書はその中の最高傑作である。ナイル川を下る豪華客船が舞台となる本作は、随所で立ち寄るエジプトの名所旧跡の観光案内も兼ねており、旅行気分がたつぷりと味わえる極上のトラベル・ミステリである。本作を読んで、ポアロとともにエジプト観光気分を満喫してみよう。

そして本作でも、真相を隠す作者のテクニックの素晴らしさを堪能できる。登場人物たちのある人間関係が真相の核心となるのだが、作者の隠し方が巧妙であるため、それに気づく読者はほとんどおろまい。

#### 私の一押し!!

このコーナーは、各回のテーマに関して、一般的には特に評価が高い作品ではないものの中から、私が個人的にお勧めしたい作品を紹介する。

#### ◎『忘れぬ死』（1945年）（★933ク 早川書房）

【内容】 男を虜にせずにはおかぬ美女ローズマリー。彼女が自分の誕生パーティの席上で突如毒をあおって世を去り、やがて1年がたった。彼女を回想する男女6人がいた。彼らが1年前と同じ日、同じ場所に再び集ったとき、新たな悲劇の幕が上がった! 複雑な人間関係と巧みなプロット、鮮やかなトリックが冴える中期の秀作。

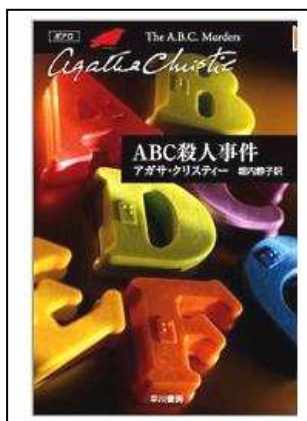
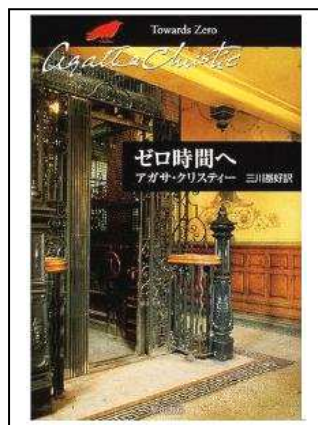


美しくお金持ち、でも頭は空っぽで自己中心的な女性ローズマリーが物語の中心である。物語前半は、彼女をめぐる男女6人の愛憎ドラマが繰り広げられるが、これが無類に面白い。これを読むと、クリスティーが恋愛小説の書き手としても一流の腕を持っていることを納得してもらえらるだろう。

さてそのローズマリーであるが、実は彼女は物語開始の1年前にすでに不可解な状況で毒死している。その妻の死の真相を解明せんとして、同じメンバーを集め、同じ状況を再現した夫。しかし悲劇は再び繰り返されてしまうのだ。確かに毒を仕込んだにもかかわらず、誰にもそのチャンスがない。いかにして毒は仕込まれたのか。クリスティーが用意した犯人とトリックは、衝撃的なまでに予想外なものだったのだ！ 物語もトリックも掛け値なしに一級品である。それなのに本作の一般的評価はさほど高くないのである。それは、シリーズ探偵が登場しないせいかもしれないが、やはりこれには首をかしげざるをえない。

最後に、もっとクリスティーを読みたい人のために、クリスティー・ファン・クラブ (<http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~lilac/christie/index.htm>) が選んだベスト・テンを紹介しておこう。

1. ◎『そして誰もいなくなった』(1939年) (★933ク 早川書房)
2. ◎『アクロイド殺し』(1926年) (★933ク 早川書房)
3. ◎『オリエント急行の殺人』(1934年) (★933ク 早川書房)
4. ◎『予告殺人』(1950年) (★933ク 早川書房)
5. ◎『ナイルに死す』(1937年) (★933ク 早川書房)
6. ◎『カーテン』(1975年発表 執筆は1943年)  
(★933ク 早川書房)
7. ◎『ゼロ時間へ』(1944年) (★933ク 早川書房)
8. ◎『ABC殺人事件』(1936年) (★933ク 早川書房)
9. ◎『葬儀を終えて』(1953年) (★933ク 早川書房)
10. ◎『白昼の悪魔』(1941年) (★933ク 早川書房)



第3回は9月を予定。「エレガントな推理 エラリー・クイーン」。  
「コラム」としてインタビュー記事も掲載予定です！

- 【注】 1.◎『』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。  
○「」は、小説の題名です。  
2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。  
3.小説の内容については、書体を違えています。